

歌舞伎の 下座音楽は おもむろい

「歌舞伎のオーケストラ」下座音楽の魅力を探る



日本伝統音楽の魅力を探る
レクチャーコンサート Vol.4



日時 平成20年 **8月19日** (火) 午後6時30分開演
(開場午後6時)

会場 **府民ホールアルティ**

TEL 075-441-1414

京都地下鉄烏丸線今出川駅下車南へ徒歩5分

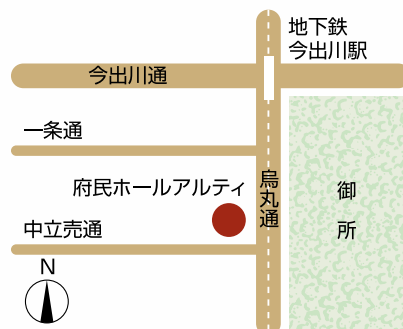
主催 京都和文華の会

共催 真如苑

協力 立命館大学アート・リサーチセンター

社団法人 京都デザイン協会

NPO法人 京都文化企画室・NPO法人 檜の会



歌舞伎の下座音楽はおもむろい

●下座音楽

歌舞伎はその発生時から音楽劇としての性格が強く、音楽はなくてはならない存在でした。現在の歌舞伎舞台において、もしも下座音楽がなければと、改めて考えてみると分かります。ところが、下座音楽は、通常舞台の裏側で演奏されているため、観客である私たちはあまりその存在に気づいていないことが多いようです。

下座音楽は、歌舞伎の発生時には、能と同じく、舞台の奥に座って演奏していましたが、次第に演劇として複雑化して、目立たない位置に移るようになりました。最初は、能楽と同じく四拍子(笛・鼓・太鼓)のみでしたが、三味線が入り、歌舞伎音楽として成立します。その後、舞台の上手に陣取っていたものが、幕末期に下手に移動して現在の「黒御簾」内での演奏になりました。そのため、歌舞伎の音楽を「下座」「黒御簾」などとも呼び、演奏者を「囃子方」「お囃子」ともいいます。舞踊の演目の時に舞台奥の雛壇に座り「出語り」「出囃子」で演奏する以外は、黒御簾の中で観客には見えない場所で演奏するので、「陰囃子」の呼称もあります。

下座音楽には、「唄」「三味線」「鳴物」の職分があり、この三者が提携して、幕明き、人物の登退場、台詞や立回り、場面転換や幕切れの他、特殊な場面にも重要な音楽的効果を演出します。現行曲は、800曲を越えると言われており、その用法は、極めて複雑で、江戸と上方でも、その内容が異なります。

今回のレクチャーコンサートでは、あまり意識されることのないものではありながら、歌舞伎の舞台に不可欠の下座音楽にスポットを当て、その魅力について掘下げて行きます。特にその舞台効果を探るため、実際の舞台映像と絡めつつ、できるだけわかりやすく鑑賞していきたいと思えます。

●会場

府民ホールアルティ TEL 075-441-1414
京都地下鉄烏丸線今出川駅下車南へ徒歩5分

●開催日時

平成20年8月19日(火) 午後6時30分開演
(開場午後6時)

●主催 京都和文華の会
〒611-0033 京都府宇治市大久保町上ノ山51-35
TEL/FAX 0774-43-7577

●共催 真如苑

●協力 立命館大学アート・リサーチセンター
社団法人 京都デザイン協会
NPO法人 京都文化企画室
NPO法人 檜の会

●コーディネーター

中村 寿慶 (なかむら じゅけい)

1973年 京都にて中村流三世家元 中村寿鶴の長男として生れる。幼少の頃より父に手ほどきを受ける。

1987年 父の伯母である藤舎流宗家 藤舎せい子師に入門。

1991年 プロの邦楽演奏家として各公演に出演。

2000年 父の前名である中村寿慶の名を二代目として襲名。

現在、歌舞伎、日舞、各邦楽演奏会に多数出演。また、大蔵流狂言の茂山家との新作狂言やドイツのカンマーフィルハーモニー・プレーメンとのコラボレーション等、クラシック音楽にも意欲的に活動中。

●演奏

・鳴物 中村 寿慶 (なかむら じゅけい)

・鳴物 藤舎 悦芳 (とうしゃ えつほう)

・笛方 藤舎 華生 (とうしゃ かしょう)

・三味線 杵屋 浩基 (きねや ひろき)

・三味線 今藤 敏之 (いまふじ としゆき)

●構成解説

赤間 亮 (あかま りょう)

北海道出身。早稲田大学文学大学院にて歌舞伎史を専攻し、演劇博物館助手を務めたあと、1991年から立命館大学文学部で近世文学や古典芸能などの講義を担当。歌舞伎出版物の研究を専門にし、現在は役者絵の研究にも力を入れている。同アート・リサーチセンターでの映像や資料のデジタルアーカイブ研究によっても知られている。

●お申込方法

入場整理券が必要です。

7月19日(土)から入場整理券を府民ホールアルティでお渡しします。遠方の方、ご都合のつかない方は、はがき又はファックスで京都和文華の会までお申し込みください。満席が予想される場合はお断りすることがあります。